

第三章 自由の灯いまだ消えず

1 開校十周年前後

昭和七年六月三十日、横浜港の大桟橋から太平洋丸の大きな船体が静かに離れていく。見送りの大群衆とのあいだに張られた無数のテープを、じょじょにじょじょに引きのびしながら。

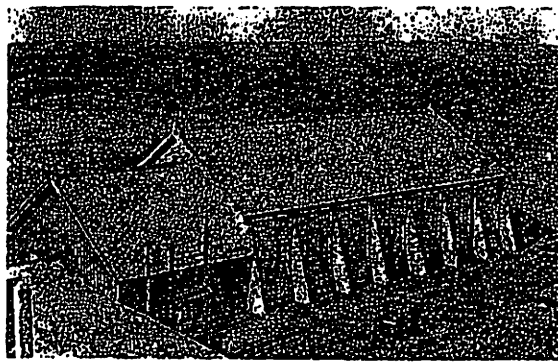
泳げ せいぜい しぶきをあげて

君等のかいな 君等の足は

われらが日本の 青年日本の

かいなだ 足だ

という水泳チーム応援歌の大合唱が、なおも何回となくくり返される。船上で手を振る人びとのなかに、J O A K (いまのNHK) から派遣される人気アナウンサー、のちに「ハマの早慶戦」の中継放送でもなじみになる松内則三アナの姿もみえ、そして、横浜商南下津屋俊夫教授の顔もみえた。この年八月からロスアンゼルスで開く第十回オリンピック大会に向かう、日本選手団一行の鹿島立ちであり、下津屋教授にとっては、日本体操チームの監督兼マネージャーとしての出発であった。日本体操チームは、この大会からはじめてオリンピックに出場した



体育館外観

ところで、昭和二年三月完成した高商の体育館は、付属室を合わせて広さが一七二坪（五六四・三平方メートル）、高さが七・二メートル。そのなかに、当時他の高等専門学校にはみられなかった鉄棒、平行棒、鞍馬、吊り輪など、近代体操の設備を完備し、体育専門学校にもひけをとらない施設であった。この体育館を基盤に、近代体操のリーダーのひとりだった下津屋教官を得て、昭和二年六月には学生三十五名による体育研究会が結成され、同九年にはこれが体研体操部になり、さらに十三年には学友会の体操部となって、この間、同十年十月から創始されたインターカレッジ競技会二部に出場、明大と覇を争って優勝をとげるにいたる。以来、数年間これに連続優勝。横浜高商は、当時、東京高師、早稲田、慶応、日体専門の四校とならぶ、体操振興の先駆校となった。

さて、話をはかると、昭和七年のロス・オリンピックもおわって秋も深まった十一月のある日、多摩川の登戸河原に二十名ぐらいの学生の一団が集まっていた。川面を吹きわたる風はもうすっかり肌寒い。横浜高商と東京商大専門部の学友会総務部および運動各部の幹事たちであった。

のだった。日本選手団の団長は、横浜政財界の有力者であり、戦後横浜市長となって「スポーツ市長」の愛称をもらった平沼亮三であった。

第三章 自由の灯いまだ消えず

この年は二月九日に、金輸出解禁とデフレ政策の推進者であった井上準之助蔵相が右翼血盟団のテロリストに射殺されるという、血なまぐさい事件が年初に起こった。井上の政策そのものは、前年暮れ成立した大隈内閣高橋是清蔵相によってくつがえされ、すでに、金輸出再禁止と積極政策に転換されていたのであるが、さらに同年二月中には、東大生が建國憲反対と授業料値上げ反対のデモで警官隊と乱闘、二十数名の検束者を出し、上海では、戦争拒否の陸軍兵士六百名が武装解除され、うち二百名が銃殺、翌三月には、長野県六十二校、東京二十校、茨城県数校の小学校が、赤化教員の大盤検挙で休校、といった事件が連続し、満州事変勃発（前年の九月）後の右翼、軍部の台頭と、それに反発する左翼活動への弾圧の強化を物語っていた。警視庁はこの年六月、特別高等警察部、悪名高いかの「特高」を創設している。この間五月には、大磯付近の坂田山で、慶応の学生と静岡の素封家の娘とが情死。「天国に結ぶ恋」の坂田山心中として歌にもなり、その悲恋が人びとのロマンを希求する心をゆさぶった。

こうした物情騒然たる世相のなかで、ロスアンゼルス・オリンピックは一条の光であった。とくに、当時水泳王国を誇った日本チームが、四百メートルの自由型を除く全種目で優勝するという偉業を打ち立てたばかりでなく、陸上競技でも南部忠平選手が三段とびで、また、西中尉が馬術の大障害飛越で、それぞれ優勝をとげて、日本人びとを熱狂させた。わが下津屋教授の率いる日本体操チームは、そのころはまだ初出場でそう目立った活躍をするまでにはいたらなかったが、同教授はその帰国第一声で、「日本の体操は将来必ず世界に冠たる地位にまで躍進する」と言明、体操の普及と人材の発掘に東奔西走の活動を開始した。中等学校体操競技会を企画、そ

の創始にこぎつけ、その委員長として運営に努力したが、この競技会に個人優勝した升本正男少年が、やがて四十年後の昭和四十七年、第二十回ミュンヘン・オリンピック大会で、夏史上初の団体総合四連覇の偉業を成し遂げた日本体操選手団の監督に成長するのである。しかし下津屋教授自身は、四十七年八月、ミュンヘン・オリンピックの終了を待たずに逝去した。



高商ゆかたを落て

あつた。

昭和七、八年と中止されていた「高商ゆかた」の売り出しは、九年六月下旬から再開された。昭和六年まで、消費組合が越前屋の手を通じて売っていたのが、越前屋の没落で二年間中止されていたもの。こんどは卒業生の業者が製造を引き受け、一反一円五十銭の実費で売り出された。波の模様にはYCCのローマ字をあしらったYYCCゆかたである。以来、数年間その売り出しがつづく。

こうして富士見ヶ丘の学園は、昭和九年秋開校十周年を迎えることになった。十月中旬から十二月はじめてかけて、記念行事が連続して行なわれた。十月中旬、同窓会主催の教職員、学生、卒業生の物故者慰霊祭、同窓会大会を皮切りに、名士講演会、提灯行列とつづき、この年は校内体育大会だけでなく、近府県中等学校の陸上競技大会はじめ柔・剣道、弓道、庭球、蹴球、籠球大会も開かれた。そして十一月十日、開港記念館で開かれた祝賀大音楽会は、記念行事の大きなヤマであった。東京音楽学校生徒三百十名のオーケストラと合唱団が出演するデラックス版で、本校音楽部員の校歌、祝歌合唱について、管絃楽・ゴールドマルク作曲の楽劇「サンタラ姫」序曲、シューマンの「夢」、メンデルスゾーン「おおひばり」の混声合唱、管絃楽「アルルの女」第二組曲等が演奏され、聴衆を夢幻境にさそわずにはおかなかった。

十二月一、二日、記念行事のさいごを飾ったのが、富士見ヶ丘の講堂で開催された恒例の外語劇大会。スペイン語「デメトリオ・モンターノ」、中国語

第三章 自由の灯いまだ消えず

「それじゃ焼こう」「おう」

どちらからともなくそう言い合うと、高商柔道部幹事のSが、手に持っていた優勝旗の柄をひざに渡し、両端を握った左右の腕に力を入れて「バシッ」と二つに折った。金糸、銀糸の織りなされた旗がその上にかかれ、マッチの火がつけられる。青春の夢と追憶をやどした優勝旗は、こうして二分間ばかりのうちに灰となった。昭和四年高工との野球定期戦が中止となったので、高商は東京商大専門部に試合をいどみ、昭和五年から、野球、柔・剣道、弓道、陸上競技、庭球、水泳、蹴球、籠球の九種目にわたる総合競技定期戦が開始されたのであった。五、六年とも高商が優勝したが、七年になって高商側が、すでに六年から対高工野球定期戦が復活していたこと、東京までの各チーム移動で予算もかかることから、廃止を提案、商大専門部側もこれに応じ、さらに同専門部からの申し出をいれて、高商側の手にあつた優勝旗は、焼却しようということになったものである。同年五月には、この対商大専門部定期戦の存廃問題もからんで、学友会の予算会議が紛糾、各部の予算決定が遅れたため、予算案の元締めである総務部幹事がついに辞任、後任は、三年生（七回生）の学生大会で、無記名投票により選出する一幕もあった。しかし、多摩川原頭の優勝旗焼却式で、問題の対商大専門部戦も幕を閉じることになった。

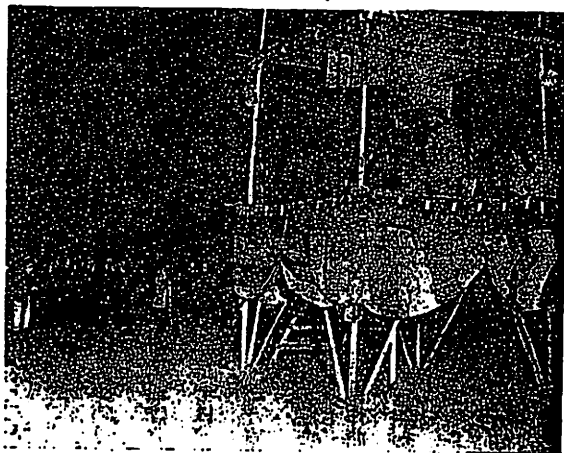
この年の秋から、大正十四年以來つづけられてきた大運動会がとりやめられ、校内のクラス対抗の総合体育大会に切りかえられた。高工での仮住まいから富士見ヶ丘に移ったばかりで、まだ一、二年生しかない大正十四年の十一月開かれた第一回運動会では、近県中等学校のチームを招いてその陸上競技会も併せ行なわれ、以来この方式が踏襲されて、市民の人気を集めてきた。これが、昭和七年からは予算の節約のため、校内だけの体育大会にかわったものだ。こうして、各種目クラス対抗、すなわち優勝種目の最も多いクラスを優勝とすることにして、この年十一月四、五日に開かれた体育大会では、三年C組が優勝した。キャンパス・ライフの二つの交差で



プール開き

外語劇の舞台裏をユーモラスにさらけ出して見せながら、二木白人こと井上龜さん（当時の学生の愛称）は、学生の芝居はあくまでも学生の芝居で、そのうまい、へたは問題でなく、メイクアップや舞台装置に汗と努力をにじませ、劇をやることそのものに意味があることを指摘したかったのであろう。

開校十周年記念行事のひとつとして、同窓会の後援のもとに進められた水泳プール建設は、昭和十二年完成、同年五月三十日盛大なプール開きが挙行された。同窓会は開校十周年の昭和九年に、プール建設総予算七千円（いまの貨幣価値で約六百五十万円）の半額三千五百円を寄付することに決定、実行委員が東奔西走して会員から寄付を集めた。開校当初のころ、水泳部は、弘明寺の高工の奥にあった農業用貯水池を借りて練習した。広くて深く、水もきれいな池だったが、コイやフナと



開校10周年・夜のうたげヤグラを組んで

「五祖と六祖」、英語「ベニスの商人」、ドイツ語「世襲山番人」、フランス語「スカパンの詭計」と、学生たちの日ごろの研さんを示す熟演につぐ熟演がくりひろげられた。

外語劇は翌十年も、十二月中旬の夜曉堂を会場に、光井武八郎教授のオープニング・アドレスで開幕、フランス語劇「服装が物を言う」をトップバッターに、ドイツ語「平行」、英語「ハムレット」、支那語「長恨歌」、スペイン語「町の幻」があいついで上演され、富士見ヶ丘に月ののぼる九時ごろ、ようやくその幕を閉じた。二木白人のペンネームで、当時『高商学報』に随筆などの健筆をふるっていた経営学担当・井上龜三教授の対話風外語劇評を次に掲げておこう。

『あの二階で怒鳴るのは何ですか、やはり出演者で（中略）

舞台を観客席まで延長してるわけ』

『なに、あれは芝居という大向うなのだ。義勇的の学生が大向うの役をつとめているのだ。』（中略）

『これで三年つづけて見ているけど、いつも同じような劇ばかりやっているんですね。』

『学校の語劇というものには批評家もいなければ舞台監督もいないのだ。外国語の暗誦会の変形と思わなくちゃいけないんだよ。』（以下略）『横浜高商学報』第六十七号、昭和十年十二月二十一日付、二木白人「外語劇・観客席である話」]

その年の秋、高商生の一隊は富士の裾野へ野外教練に出かけた。学報部記者M・S生の「従軍記」によると、出発の日は、午前八時、カーキ色の作業服に身を固めた。にわか兵隊さんが横浜駅のプラットフォームを埋め、熱海行きの列車がごうごうと入ってきて、それに乗りこみ御殿場方面へ向かう。その日は裾野の部落での戦闘訓練をおえて、滝河原の廠舎につく。そのころ、こうした演習用の軍の宿営施設として、木造バラックの廠舎と称する建物、富士の裾野の三カ所ほどに点在していたものだ。早速涵保へとんでいくと、気の早い連中はもうひ

同居、いや同泳? だった。また、夏休みの合宿は、西戸部の神中(神奈川県立横浜第一中学校、いまの希望ヶ丘高校)の近所に部屋を借りて、同中学のプールを使わせてもらったり、あるいは、東京石神井にあった東京商大予科のプールを使って、同予科といっしょに合宿練習をしたり、とにかく、プールがないばかりに苦勞の連続であった。そうした時代を知っている先輩たちとしては、じっとしておれない気持ちだったのである。

こうして、学校、同窓会を一九とした努力はようやくみのった。十二年五月三十日のプール開きには、当時日本を代表するチャンピオンであった日本大学の葉室選手らが来場、模範水泳を見せてくれた。そしてその後、水泳部の進況はひときわ目ざましく、昭和十五年七月の横浜五専門学校(高商、高工、市立商學專門、横浜專門、関東學院の五校)大会を制覇し、東部高商大会では二位を占めるチームに育っていったのである。

2 軍事教練もたのし?

昭和七年のある日、富士見ヶ丘のグラウンドには二年生のひとクラスが、作業服にゲートルばき、銃を手にして、二列横隊に並んでいた。配属將校の田中陸軍中佐が隊列に向かってまん中に立ち、そのかわらで教官の小白大尉が、いまし出席をとろうとしている。と、かけつけたひとりの学生が、隊列の左端にすべりこんだ。ゲートルは巻いているが、胸下駄をはいている。井土ヶ谷同潤会住人の某だ。田中中佐が見とがめた。

「きみ、その格好は何か!」

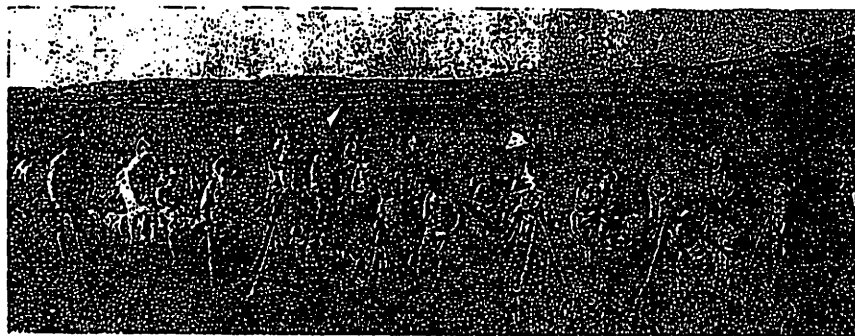
「ハイッ、格好は変であります、精神はしっかりしります。」

とっさに不動の姿勢をとった某がそう答えると、中佐は「よろしいッ」といって、それっきり。だれかが、ク

スッと吹き出した。小白大尉が出席簿の名前を呼びはじめる。大きな声、ボソッとした声、太い声がそれに答えると、なかにワン・オクターブ上げたようなすっとな狂な返事が返ってきた。「ははん、代返やつてるわい」隊列にいた八回生のO・Kは、そう思いながら小白大尉の顔を見てみると、気のせい、ニヤリとしたような感じがした。ときには代返がバレて「何だ、君は二度返事してるじゃないか」とやられることもあったが、教官たちがそれ以上怒ることはめったになかった。

すでに満州事変がはじまり(昭和六年九月)、上海事変が起こって(同七年一月)、時局はしだいに緊迫の度を加えていたが、学生たちの軍事教練の受けとめかたは、まずこんなぐあいだった。大正十四年の四月、高商の第一回生が二年生になったばかりのころ、軍部と文部省との協定ができて、陸軍現役將校学校配属令の公布によりはじまった軍事教練は、それまで、学卒者が一年間入営して少尉になって帰ってくる「一年志願」の制度を、教練を受けたものに対しては、十月月に短縮するというものであった。発足の当初は、早稲田大学や小樽高商などで学生のはげしい反対運動にあったが、もう昭和もこのころになると、幹部候補生制度としてすっかり定着した形になり、どうせ兵隊にはとられるのだから、一兵卒でいじめられるよりは幹部志願したほうがよい、それには教練も受けておいたほうがいいが、できるだけ気楽にこころや、というのが、一般の学生の気分だった。

その年の秋、高商生の一隊は富士の裾野へ野外教練に出かけた。学報部記者M・S生の「従軍記」によると、出発の日は、午前八時、カーキ色の作業服に身を固めた。にわか兵隊さんが横浜駅のプラットフォームを埋め、熱海行きの列車がごうごうと入ってきて、それに乗りこみ御殿場方面へ向かう。その日は裾野の部落での戦闘訓練をおえて、滝河原の廠舎につく。そのころ、こうした演習用の軍の宿営施設として、木造バラックの廠舎と称する建物、富士の裾野の三カ所ほどに点在していたものだ。早速涵保へとんでいくと、気の早い連中はもうひ



野外演習・富士の裾野で

と足先きに押しかけていて、廠舎便りの絵葉書などを買っている。晩めしも意外な一馳走だったが、食後の点呼がおわれば、あとは自由行動。三々五々連れ立って外に出ていくものもあれば、真っ赤に燃えている囲炉裏の炭火をかこんで、清々談に花を咲かせるもの、あるいは、一団になってトランプに興じるものもある。消灯後にこっそり帰ってきて、班をまちがえ「オレの寝床がない」とあわてたものもあったとか。

第二日は、起床ラッパとともにとび起き、毛布をいい加減にまらめて外に出ると、目のまえに富士山の秀麗な姿がそびえ立っている。少し肌寒いが、消列な空気をハラっぱい吸いこんでいい気持ちだ。この日は陣地攻防戦の演習。小白教官の双眼鏡を借りて眺めると、野外演習の監督に同行している岡野、井上、時田三先生の姿も見える。やがて、突撃ラッパが休戦ラッパにかわって、演習おわり。この日は夕食後、夜間戦闘訓練もあった。

第三日は、乙女峠の険を越えて仙石原方面へ行軍。途中、峠の茶屋で小休止するころはだいぶヘタばっていたが、腰をおろしてお茶をのむと、何とも素晴らしい眺望だ。夕刻、旅館仙郷楼に着き、温泉につかって疲れを休めると、夜は愉快なクラス会となる。各組スター総出演で、時吟をうなめるもの、民謡をうたうもの、さては掛け合い万才をやるもの、哄笑、爆笑、

拍手のたえまなく、元気な合唱が、時のたつのも忘れてつつけられる。

あくる朝、箱根の気分を味わいながら帰途につく。「箱根へいってききましたよ。御殿場から乙女峠の険を踏破しましてね」「すると富士登山?」「いや、仙石原の仙郷楼って、大きな旅館に一泊しまして……」「ほう、豪遊ですな」「なーに、学校の野外教練で」さっとまあこんな調子の、安い物見遊山の気分だ。保土ヶ谷駅からダラダラ坂をとおっていくと、輝く白雲が見えてくる。学校だ。わずか三、四日のことだが、十日間もあけていたように思える(『横浜商商報』第四十三号、昭和七年十一月二十四日発行、「富士の裾野観戦記」より構成)。

このように毎年三、四日の日程で、富士の裾野や習志野、あるいは上総一宮へと野外教練に出かけ、そのときには、配属将校や教練の教官のほかに、校長はじめ教授陣が二、三名交替で監督に同行した。そして、年の暮れには、陸軍歩兵第一旅団長が来校して、教練の査閲が行なわれる仕きたりだった。昭和七年の十二月には、第一旅団長だった朝香宮が査閲に来校、翌年十二月には、のち陸軍省軍務局長となり、昭和十年八月相沢三郎中佐に斬殺されるにいたる永田鉄山少将が、やはり第一旅団長として査閲を行なっている。

日本軍の中国侵略がしだいに拡大していったところであった。だが、学校教練はいかかわらずのノンビリムードで、九回生(昭和十年卒)のK・Tらが、上総一宮、九十九里方面に野外教練にいったときは、銃は各自が持たずに貨車送り、ふだんの手入れも、学校の小使いさんがみなやってくれた。中学校時代とはまるでちがいが、さすがは高商、ジェントルマン扱いだな、と思ったものだ。十三回生(昭和十四年卒)のY・Cも、教練はよくサボった、と述懐している。二・二六事件が起こり(昭和十二年二月)、支那事変(同十二年七月)によって宣戦布告なき日中戦争がすでに開始されたところで、陸軍でも、それまで中佐級だった大学専門学校への配属将校を大佐級に改め、学校教練にいったそう力を入れようとしていたところであった。横浜高商には、昭和十一年十二月から佐分利重雄大



教 練 査 問

佐が配属されていたが、Y・Cたちがよくサボって「ザキ(伊勢佐木町のこと)・プラにでもいこうや」と、学校の坂をおりかけると、むこうから、片足の悪い佐分利大佐がビッコを引きながら坂をのぼってくるのに、バツタリ出つくわす。両方とも、これから教練があることは重々承知のうえだが、大佐は何もいわず、ニヤリとしておりすぎていく。そんな調子であった。さすがに卒業期の近づくころ「次のものは、幹部候補生の推薦をしないゾ」と、欠席の多い学生の名を呼びあげてハッパがかけられ、それからあわてて教練の時間に皆勤したが、結果的には、だいたい推薦してくれたようだ、という。

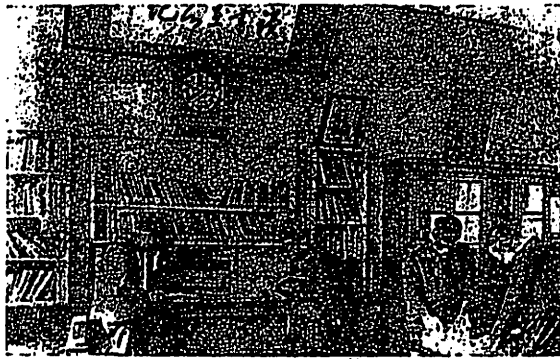
自由主義の伝統の根強い大学高専校に対しては、軍部もまだ手加減をしていた時代であったし、軍事教練もしよせんは「戦争ごっこ」にすぎなかったから、学生も気楽にいったということであろうか。

3 そのころの学生生活

—— 学内の雰囲気、読書、映画 ——

昭和八、九年ごろまでは、特高警察の刑事が学校内をウロウロしているというようなことが、学生たちの話題となった。警視庁は昭和七年六月二十九日に特別高等警察部を新設、以来、すでに地下深く潜行していた共産主義者から、社会民主主義者、のちには自由主義者にいたるまで、この特高による残虐無類の弾圧と追及のまこととなったのであった。高商の数少ない左翼活動家たちが参加していたグループは、R・Sと呼ばれ Reading Societyつまり「本を読む会」の略称であった。八回生O・Kのクラスメートにも、そうした学生が二、三名おり、思想要注意者として警察のリストにものせられ、年じゅう刑事に尾行されて、学校のなかまでしらみつぶしに闘べられたこともある。そのなかのひとりYは警察につかまり、ついに退学処分をやむなきにいった。

昭和十二年ごろ、学校のグリーククラブに属していた十二回生のK・Tは、歌が好きで外部のコーラス・グループにも加わっていたが、ある日、そのグループの会合で、年長の青年に話しかけられた。「実はオレは君の先輩なんだが、赤で学校を追いつかれたんだ。」そういって青年はさびしうに笑った。Yであった。それ以上打ちとけて話し合える時世ではなかった。K・Tは、いまでもそのときの印象が忘れられないという。また、十三回生のY・Cはまだ中学生のころ、兄がO・Kと同じ八回生で高商にかよっていたが、ある日、兄のクラスメートがやってきて「警察に追われているんだ。この本を預ってくれ」と、左翼関係の本を何冊か兄に預けていったのを覚えている。その兄の学友も、まもなく警察につかまったが、コネをたどって何とか釈放され、卒業だけではで



図書館にて

ようなものがないかったことは、徳増教授が戦後いち早く学國民主化運動の旗手となり、のちには国大の初代経済学部長ともなって、順調な生涯をおえたことによって明らかであろう。昭和十五年ごろになると、あるとき、学校の坂の下で、左翼関係の人間が学生にピラを配って問題になったことがある程度で、学園内のそうした活動はすっかり影をひそめていた。一般の学生は、いまでいうノンポリからやや右寄り、というのが大勢であったが、学生たちはしんから時局に迎合していたのでもなかった。禁じられたものには、それだけ余計に関心をつのらせ、真実を求めていたのである。自由の灯はともりつつづけていた。

昭和十年七月、学校当局は学生の生活調査を実施した。在籍学生五百九名に対し四百七十五名（九三％）の回答率で行なわれたものだが、

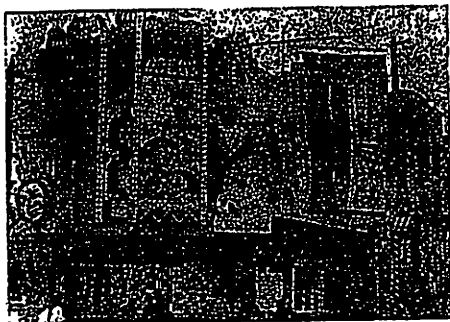
第三章 自由の灯いまだ消えず

きたという。

こうした一部の活動家の動きも、昭和八年ごろをさかいにパッタリととだえ、その後学園は一時期静かになった。そして、かつての就職難は解消し、やがて戦争への道につながるものであったとはいえ、世はしだいに軍需景気を謳歌して、一般学生にとっては、むしろ元禄時代の再来のような時世になっていった。本牧のチャプ屋街もあいかわず繁昌していたし、伊勢佐木町裏の飲み屋にもよく出かけた。「かねの橋」（吉田橋）手まえのおでん屋「しまや」で「みっちゃん」という娘さんのエクボにひかれ、ひとり分二円ぐらいを投げ出して飲み明かしたのも、このころであった。

学生の通学服装は、上衣は学生服だったが、下はフラーノ替ズボンがすごく人気があり、当時中学生までは禁止されていたバーバリのレインコートが着れたのも、うれしかった。カバンは一般に持たず、本や辞書はフロ敷かブックバンドでしぼり、それに、インクつばをぶら下げて歩いていった。万年筆なんていう高級なものは持たず、Gペンでノートをとっていたからだ。当時の学校の講義は、先生が下調べしてきたノートを読みあげ、学生がそれをせせと筆記する、筆記がおわると、先生がコメントを加える、またノートを読みあげる、そういったスタイルが一般的だった。サボリ学生は、したがって試験まえになると、学友のノートを借りて写しとるのが、落第をまぬがれるための最低限の対策だった。六回生のO・Sは、このノートとり授業スタイルへの反発もあって運動部に熱中し、試験がちがづいても、ひとりグラウンドを走りまわっているのが有名だった。勉強すべきタネ（ノート）がなかったから、せいぜい運動部の学友のノートを眺ましてもらおうことぐらいで、すましていたわけだ。後年かれは、三菱系の大会社の社長になり、このノートとりスタイルが「いったい、何のうところがあつたのでしょうか」と、鬱憤をぶちまけている。

満州事変から支那事変を経て世間がさわがしくなるにつれて、この「ノートとり」が障害になることもあった。昭和十三年ごろのある日、経済史の講義をしていた徳増栄太郎教授は、突然、ノートを読みあげるのをやめ、「いまから言うことはノートをとってはいけない」と顔をこわばらせた。それから話されたことは、唯物史観の見方に立った経済の発展史だった。だれひとりノートをとるものはいない。ふだんの授業には見られない熱心さで、学生たちは一語もききもらすまいと、教授の顔を注視していた。戦時下の昭和十七、八年ごろまで、こうした情景がときどきくり返された。しかし、学生たちのだれひとりとして、こうした講義の内容を学外に通報する



オデオン座正面

「巴里祭」が横浜で封切られたとき、第二外語でフランス語をやっていた九回生のK・Tは、時田教授にその台本を全部、授業中に購読してもらって、オデオン座に乗りこんだが、会話はやっぱりんでわからなかった。その情熱だけを買うべきかもしれない。アメリカ映画は当時、一般に通俗的すぎてバカらしい、というのが学生たちの定評だったが、「メリー・ウィドウ」(昭和十年作品)、「ベンガルの槍騎兵」(同)といったいいものは人気を呼び、クラーク・ゲブル、ゲリー・クーパー、ロバート・テラー、フレッド・アステア、ジンジャー・ロジャースといったところが、評判スターだった。これらの映画のなかでも、ハンス・ヤーライ扮するシュールトのあわい恋を描いて、その作曲のかずかずをきかせる「未完成交響

『横浜高商学報』第六十七号(同年十二月二十一日付)によると、その内容は、まず、

▽世界観、主義主張——こういうむずかしい問題を簡単に、というので正確を期すことは無理、という駐蹕つきだが、自由主義一二、日本主義八五、現実主義五一、理想主義四九、国際平和主義二七、民主主義一八、人道主義一三、人格主義一一、統制主義九、家族主義九の順。

▽購読新聞——『東京朝日』、『東京日日』、『読売』、『横浜貿易新報』、『中外商業』の順。

▽購読雑誌——『経済往来』、『中央公論』、『改造』、『経済知識』、『ダイヤモンド』の順。『キング』の九五票は大部分が一年生、『富士』、『講談倶楽部』各四票もともに一年生。上級生ほど総合雑誌や経済専門誌を読む。

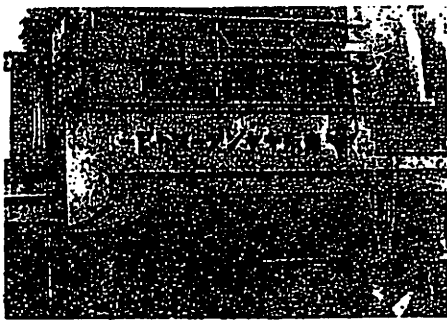
▽私淑する人物——西郷隆盛八五、乃木大将三三、東郷元帥二五、高橋是清二二、楠木正成一九、渋沢栄一一六、野口英世一五、吉田松陰一二、豊臣秀吉一二、福沢諭吉八、リンカーン八、ビスマルク七、ナポレオン六、その他キリスト、釈迦、ソクラテス、孔子にならんで、ヒトラー、ムッソリーニの名も見える。

▽娯楽趣味——映画二二六票、音楽二一〇票が圧倒的、その他読書一三七、散歩七〇票など。

世界観に対する答えや、『中央公論』や『改造』などの総合誌が広く読まれていたことをにらみ合わせると、学生の大部分が自由主義的な志向を持っていたことがうかがわれる。

この生活調査にあらわれているように、昭和十年前後は、映画とくに外国映画、それに喫茶店——いわゆる「純喫茶」でのレコード音楽鑑賞が、学生のレジャーの中心を占めていた。「十銭のコーヒー」ばいで女の子の美しい顔を眺め、デートトリップを論じ音楽を鑑賞するのが、現代学生のもっとも安価で、収穫の多い「消費」(前掲『学報』第六十七号)だったわけだ。映画は、伊勢佐木町の中ほどにあった「オデオン座」によくかよった。「オデオン座」は、ちょうどそのころ、新築改装が成ったばかりで、東京の帝都とならぶ、横浜での封切り館であつた。こうした封切り館で、二本立てにニュース映画がついて料金は五十銭、二流館で三十銭、さらに場末になると二十銭以下という相場。一九二八年(昭和三年)アメリカではじまったトーキー映画が、昭和五年ごろから全盛期に入っており、学生たちにいちばん人気があつたのは、ドイツのウーファ社製作とかフランスのもの。年代順にならべてみると(カッコ内はつくられた国と製作年)「金盞は踊る」(ドイツ、昭和六年)、「狂乱のモンテカルロ」(同、六年)、「自由を我等に」(フランス、六年)、「巴里祭」(同、七年)、「未完成交響楽」(オーストリア、八年)、「白き処女地」(「商船テナシティ」)(いずれもフランス、九年)といった名画の印象を、卒業生たちはいつまでも忘れられない。フランスでは「白き処女地」「商船テナシティ」などをつくったジュリアン・デュヴィヴィエ監督と、大スターのジャン・ギャバンが大活躍の時期であつた。

「巴里祭」が横浜で封切られたとき、第二外語でフランス語をやっていた九回生のK・Tは、時田教授にその台本を全部、授業中に購読してもらって、オデオン座に乗りこんだが、会話はやっぱりんでわからなかった。その情熱だけを買うべきかもしれない。アメリカ映画は当時、一般に通俗的すぎてバカらしい、というのが学生たちの定評だったが、「メリー・ウィドウ」(昭和十年作品)、「ベンガルの槍騎兵」(同)といったいいものは人気を呼び、クラーク・ゲブル、ゲリー・クーパー、ロバート・テラー、フレッド・アステア、ジンジャー・ロジャースといったところが、評判スターだった。これらの映画のなかでも、ハンス・ヤーライ扮するシュールトのあわい恋を描いて、その作曲のかずかずをきかせる「未完成交響



森キーン正面

人の『通貨膨張政策』が取り入れられて、奥さんのおながインフレーション、という説明。ごもっとも、である。やがて、余興開始の太鼓の音がひびきわたる。会場の食堂にかけつけてみると、すでに立錫の余地もない超満員。恒例の「佐渡おけさ」「木曾節」などの踊りに、寮生有志の妙技？が披露されたあと、学生劇「噴火口に結ぶ恋」や、おなじみチャンバラ「月形半平太」とつづき、女装の美男？もまじえた大熱演ぶりに、会場は爆笑と拍手の連続。正午の余興の合間に仮設売店にいくと、寮生たちが、森キーン（森キーンディ・ストア）や明葉（明治製菓）から借りてきたエプロンを胸につけて、にわかウェイトレス？に化けている。「あら、XXさん」顔見知りの娘さんから声をかけられて、はずかしがるうい

楽」や、外国皇太子と街娘のしび逢いをエピソードに、国際会議のバカらしさを皮肉り「Das geht nur einmal...」のテーマソングが一世を風靡した「会議は踊る」など、多い人は数回も見にいつて、いまでもそのワンカット、ワンカットを覚えていたほどである。

時代は少しくさかのぼるが、昭和七年六月十六日付の『高商学報』第四十号は、映画館ガイド嬢のみた「高商生かたぎ」を特集している。そのあらましを紹介すると——洋画館オデオン座のガイド嬢は「とにかくよくおいでになるわ、学校休んで……。午前中にみえるかたが多いから（浅）割りきあり」ちよっぴり打算的ね」とおっしゃった。とにかく、あのカットはどうの、監督がどうのと理屈が多い、という話だから、そのころ富士見ヶ丘で活躍していたサークル「映画研究会」の面々のことでもあったろうか。高商生に人気のある女優は、ミリウム・ホプキンス、シルヴィア・シドニー、ジャーネット・ゲイナーとのこと。邦画の橋本宝蔵劇場では、同じ映画を見に一週間もかよいつづけた。思い詰め型もいたという。同伴はチラホラ程度と当節にくらべ、まことにつましやかであり、それも「きつと、妹さんでしやうね」とは、ガイド嬢のちょっぴりジェラシイもこめた、好意的？な見方ということになるうか。妹さんにもいろいろあったはずだから。人気のある女優は、川崎弘子が断然群を抜き、次いで田中絹代。栗島すみ子となると賛否両論があった。とにかく四十年もまえの話である。

4 そのころの学生生活（つづき）

——寮、同窓会、舞臺——

昭和八年十月二十九日、秋晴れに恵まれた日曜日の朝から、富士見寮では、第六回寮祭がにぎやかに開幕した。

午前九時、寮の門を飾るアーチの下で、寮生一同が記念撮影をおわるころには、着飾った娘さんたちの見物客が、もうチラホラ姿を見せはじめる。街の各所にはられた、歓迎！富士見寮祭のポスターと、宣伝係学生たちの女学校まわりなどにそがれた努力のかけがえがなくて、午前十時の開場ころには、街の人たちがぞくぞくとやってくる。まず、手まえの南寮から二階にあがってみると、そこは、福田要寮監（助教役）の発意と努力によってできた「植民地展覧会場」。二十畳の談話室をいっばいに使って、台湾、樺太、朝鮮、満蒙から南洋にいたるまでの珍らしい特産物がぎっしり並べられている。

反対側の北寮にまわると、妙齢のお嬢さんたちが、顔を赤らめて「まっ、いやーネ」と、足ばやに通りすぎる室がある。『インフレーションの家庭化』と題して、臨月のおなかをかかえた奥さんの人形が飾ってある。ご主

しさも好評なら、サービス満点とあって、売店とその食堂は大繁昌だ。

食券と引きかえにもらった福引券を持って、北寮下の景品引きかえ所にくくと「天つ風雲の通り路吹きとじよ」の福引券の文句で、渡してくれたのはアルバム。「乙女の姿しばし止めむ」ため、という。さて、余興のさいこの呼びものは「會長の娘」の踊り。肉体系を誇る寮生有志数名が、腰ミノひとつの裸体で、ハワイのフラダンスのようなものを踊ったと思えばよい。その手ぶり腰つきに、ヤンヤの拍手、かっさい。こうして寮祭はおわり、秋の日はもう暮れかけていた。

寮生活は、あいかわらずよろしくやっていた。夜十時半の消灯、就寝という規則で門限もあったが、遅れて帰ってくるヤツは、門を乗り越えて入ってくる。消灯後、寮監の先生が懐中電灯を手に、各室を点検してまわるが、まだ帰ってこない寮友のために、反対側の寮棟の寮生が、先生より先きまわりしてかれのフトンにもぐりこみ、頭数をそろえる。その室の点検がすむと、さっと自分の室に帰り、何くわぬ顔をして横になっていた——昭和十一年の寮生だった十三回生Y・Cらの戦法だ。当時の寮監は、商品学の南種康博教授と農業大意の福田要助教授。南種教授は温厚なクリスチャンでよく肥っていたせいかなかなかの健康家。寮生と食事をともにするときは、味噌汁のおかわりをするたびに、汁を入れた缶のふちをひしゃくの柄でカンとたたく。いつも三べんぐらいたいたいて、寮生を笑わせていた。その先生が、終戦直後栄養失調で亡くなったのだから、いたましい限りである。

福田寮監は、栄養学にも造詣深く、昭和八年の着任以来、栄養本位の給食を心掛け、米、味噌などの寮の食糧を、先生の郷里・福島県の会津から直接取り寄せるといった熱の入れ方だったが、「ゴマ塩」の礼賛者としても以後歴代の寮生たちに強い印象を残している。ゴマ塩は体にいいばかりではなく、頭を使うものにはとくに栄養になる、と新寮生にはきままって高説を垂れ、寮の食卓にはいつもゴマ塩を入れた容器が置いてある。毎食、こ

飯にそれを振りかけて食べなさい、とすすめるわけだ。よっていつのまにかニックネームが「ゴマ塩」。このゴマ塩先生が着任してまだ三カ月足らずの、昭和八年六月二十日付『高商学報』第四十八号には「新鮮な野菜でビタミン補給、寮生の体重、一カ月で一貫目ふえる」という書き出しで、新寮監の才腕をたたえる記事が載っているから、それなりの実績もあげていたわけだ。

翌昭和九年二月のある日、当時三年の卒業をまえにしていた八回生のO・Tは、井土ヶ谷同潤会住人の代表として、富士見寮を訪れた。その三月退寮して二年生になる学生たちに、同潤会への移住を勧誘するためだ。ゴマ塩寮監同席のもとに、寮生一同が食堂に集まってきた。O・Tは例年のとおり、同潤会住宅の共同生活を賛美する大演説をおち、さいごに「食費は月わずかに九円（くえん）ですが、食えん」どころではなく、寮の食事と大差なく栄養満点で、しかも味もうまいのであります」と結んだ。とたんに寮生から大かっさいを浴びたが、同時に「寮のめしはまずいゾー」といった不満の声が、福田寮監にぶっつけられはじめた。O・Tはあわてたが、あの祭りであった。

同潤会住宅の家賃は、さきにも書いたとおり、一戸にふたりで住んだとして、ひとりあたり月二円六十銭、それに食費の九円やフロ銭などを加えても、約十五円である。これに対して、富士見寮の寮費（家賃）は月あたりにして二円、食費が十五円で、合計十七円になる。寮の食事はたしかに栄養本位ではあるが、栄養があるということ、必ずしも「うまい」ということではない。食事の献立は、学生の委員がつくる建てまえになっていたが、何といっても寮監の影響力は大きい。栄養食は学生の嗜好には合わない、という不満がともすれば押しつぶされ、ゴマ塩先生への批判が高まっていた矢先ぎであったのだ。O・Tはあとでそんな事情を知った。そして、その春の退寮生からは、同潤会移住者はひとりもこなかった。九円（くえん）事件がきっかけで、これまで同



夜の街・おでん店前

5 野球部全盛時代

さて、歴史の歯車を少しく逆回転させて、対高工野球定期戦のその後を跡づけてみよう。昭和四、五両年の中止のあと、定期戦は昭和六年から三回戦の方法で復活、六、七、八年は高商側が三年連続優勝して、高商野球部の黄金時代を迎える。塩見、宮崎（いずれも六回生）、荒木（七回生）、五十嵐（九回生）などの名投手が連続登出して、六大学の野球チームとやっても互角の勝負をした。また、荒木、五十嵐など野球部選手の多くが、卒業後、当時東葉園野球で勇名をとどろかせていた満鉄（南満洲鉄道株式会社）に就職、昭和十一年ごろの満鉄野球チームでは、高商野球部出身が七人ぐらゐも活躍して、まるで満鉄野球部を高商出が占領してしまったくらいあったほどだ。

定期戦が中止となった昭和四年、横浜では横浜公園球場が大震災後の復旧成って再開した。それまでの定期戦は、震災後の仮設球場でスタンドもろくにない新山下球場や、滝頭球場で行なわれてきたが、これで定期戦復活の物質的条件がまず整った。定期戦の中止期間は、高商野球部にとって格好の實力養成期となり、

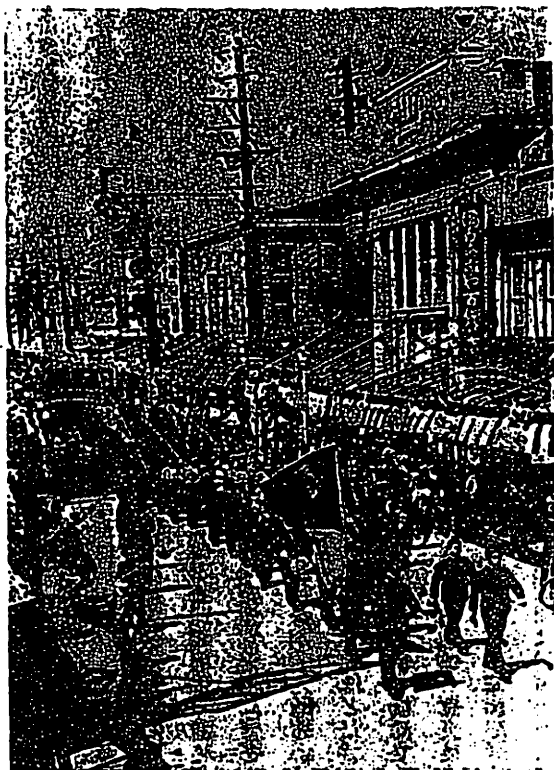
第三章 自由の灯いまだ消えず

潤会への移転をすすめていた寮監の方針が、百八十度転換してしまった——O・Tはそう解釈した。あるいは、文部省の思想指導費をも鳥肉や酒に化けさせてしまう、同潤会の梁山泊的な性格に、学校当局が警戒の色を見せはじめたのだったかもしれない。

ともかくも、同潤会共同生活の高商生の数は、これを機にしたいに減少しはじめ、やがてその歴史を閉じることになっていった。

六回生が社会に出た昭和七年春を境に、就職は好転していった。昭和七年一月二十六日付の『高商学報』第三十七号は「就職率第一位の牙城にも、吹きまくる不況の嵐」という見出しのトップ記事で、「前年（昭和六年）の卒業生百三十余名の卒業一カ月後における就職決定率が九一％と、全国官公私立大学専門学校中トップを占めた本校も、不況の嵐には勝てない」ことを嘆いていた。事実、昭和七年四月現在における就職決定率は、八七％と最低のところに落ちこんだ。ところが、同年十二月十九日付の『高商学報』第四十四号となると「激化する就職戦線、非常時相を反映して活況を呈す」として、満洲国建国（昭和七年三月）による日本産業の満蒙進出、金輸出再禁止（同六年十二月）後の円相場下落による輸出伸張といった要因をあげ、インフレ景気で沈滞を脱した感あり、と報じている。さらに、翌八年一月二十五日付の『高商学報』第四十五号は「インフレ騒歌時代きたる、求人申し込みすでに百二十余、昨年より五割増」という調子にかわっていく。

八年春卒業した七回生百四十四名のうち、就職希望者百二十五名に対する四月下旬現在の決定者は百二十一名、決定率は九七％にハネあがった。初任給の最高も百四十四円（前年は八十円）、これは満洲中央銀行で、本給八十円に六十四円（本給の八割）の手当がついたもの。まだ満洲国建国後一年がたったばかりで、危険手当の意味があったのか「これはいのちがけです」という、学報編集子の注釈つきである。初任給の最低が四十五円、平均五十



定期戦の行進・伊勢佐木町をいく

昭和四年六月には東京商大専門部を相手として、野球はじめ九種目の総合競技定期戦を開始して優勝、同七月には、甲子園の全国高等専門学校野球大会で初優勝を遂げた。応援にかけつけた井上鑑三教授が、同志社高商との準決勝戦のヤマ場で「二ストライク三ボールのあとにして、まなこつむりて神を念ぜり」と歌った、あの野球大会である。優

勝の日、夜行で帰還した選手団を「横浜駅頭には、田尻校長はじめ教授、学生、新聞社関係の人びとがプラットホームせましと待ち受けていた。凱旋將軍のような心地」だったと、当時高商投手陣のひとりだった益子選手は回想している（前掲『定期野球戦史』）。球のさすらい「高商昭和七年卒、益子勝」。翌昭和五年も高商チームは、同年度の全国高専大会の覇者四高と二戦して一勝一敗、さらに、有名な小川、佐藤、三原らの強豪を擁した早大新人軍と対戦して、5A対1で退け、このほか、東大、中央大学、専修大学等をも、大差で破る活躍ぶりであった。

こうして昭和六年春、高工野球部長と高商武石弥彦野球部監督、および両チーム主将の話し合いで定期戦復活

がきまった。高商の主張していた三回戦の方式に、高工側も同意したのだ。この間、高商二回生のY・Yらが、当時横浜の市会議員だったスポーツ好きの平沼亮三——戦後横浜市長となり「スポーツ市長」と市民に親しまれたその人に、両校間のあつせんを依頼するなどの努力が行なわれたが、高商塩見、高工三上の両主将が、当時中等野球の名門とうたわれていた兵庫県甲陽中学出身の同級生で、同じチームで苦業をともにした仲であったことが、両校交流の絶好の機会となったようだ。復活決定直後の『横浜貿易新報』は「県球界空前の盛事、高商、高工定期野球戦復活す、両校主将の友情とスポーツマンシップから……」とトップ記事で報道し、市民の期待を裏書きしている。

そして、富士見ヶ丘のキャンパスは、約三カ月間、再び定期戦中心の活動が展開されていった。まず応援団の結団式、ついで野球部選手への激励会。以来選手たちは猛練習に明け暮れ、その他の全学生は、クラスごと、あるいは学年単位に、昼休みや放課後、寮庭に集まり、桂樹をもれる新緑の陽光を浴びて、それぞれのリーダーの振る旗や手拍子に合わせ、応援歌や拍手の練習にげむ。以来、戦時下の定期戦中止にいたるまでつづいた、キャンパス・ライフのパターンだ。

復活第一戦は昭和六年五月三十一日、横浜公園球場で行なわれた。久びさの「ハマの早慶戦」に市民が熱狂したことは、前売券がプレミアム付きで売買されたことでもわかるが、当日は朝からカラリと晴れ、午前八時ごろには、公園球場前は延々長蛇の列。入場券は売り出し後わずか十八分間で売切れとなった。午前九時開場と同時に、これらのファンがなだれを打って場内に流れこみ、立錐の余地もなくなる。入りきれずにスタンドの屋上やグラウンドの塀によじのぼった見物人もズラリと並ぶ盛況。こうしてはじまった第一戦は、12A対5の大差で高商の勝ち、つづいて六月二日行なわれた第二戦も、6対3で高商チームに凱歌が上がり、高商は復活第一回戦



放送中の松内アナ

をストレート勝ちにおさめたのである。高商応援団は伊勢佐木町を勝利の行進して富士見ヶ丘に帰り、暮れなずむグラウンドにカガリ火をたき、酒ダルを抜いて乾杯をくり返し、教職員はもちろん、南太田町の人びとも加わってスクラムを組み、夜のふけるのも忘れて、勝どきをあげつつけたことであった。復活第一回戦のすばらしい人気は、つぎのように入場者数および入場料収入額の記録にもあらわれている。

入場者数	第一日	一万五一〇六名
	第二日	一万六六九二名
合計		三万一七九八名
入場料収入総額		八三五九円六〇銭

翌昭和七年も、高商軍は、定期戦まえの四月に早大と対戦して4A対2でこれを破り、つづいて法政大学にも勝利をおさめた。この勢いで六月二日からの定期戦に臨んだ高商チームは、三回戦のうち二勝一敗で高工を退け、翌昭和八年も同じく二勝一敗で高工を敗退させて、三年連勝をとげたのである。八年の試合では、J O A K (いまのNHK) がはじめて『ハマの早慶戦』の実況放送を行ない、スポーツ中継にかけては当時第一人者といわれた松内則三アナウンサーが放送を担当した。決勝戦の日、戦いおわって両軍応援団が「フレ、フレ、横浜ア

高等商業学校オ」「ハイザー高工、ハイザー高工、フレ、フレ、フレ」と正々堂々、エールを交換するのを見やりながら、同アナは、次のような感激の言葉をもって、その放送を閉じたのであった。

「十年間数ある野球放送をしてきましたが、かくも熱のこもった、学生スポーツらしい緊張したゲームを見たことがありません。じつに涙ぐましいばかりのシーンです。」

しかし、翌昭和九年から、こんどは高商軍が三年連敗の憂き目を見ることになる。そして敗戦の意気消沈は若ものたちの理性の判断をにぶらせるのか、九年の定期戦おわって母校の山に帰ってきた高商陣では、応援団があらわや選手団になぐりかからんばかりになる一幕もあった。高商チームは第一戦で勝ち、第二戦ではリリーフ投手を起用して敗退、決勝戦で再びエースが投げたが及ばなかった。ところが、応援団のなかには、これは野球部が入場料かせぎたさに、第二戦でもエースが投げれば勝てた試合をわざと引き延ばしたんだ、と誤解するものが出てきたのである。「野球部のコマーシャルイズムを排撃せよ！定期戦は入場料かせぎじゃないゾ、墮落した選手をなぐれ！」という声が学生のなかからあがり、興奮した応援団の猛者たち数十名が、首うなだれてしよう然と立っている選手団をとりまき、いまにもなぐりかかろうとする形勢になった。「学校の名誉にかけて、バカげた行動はやめよ！」と、田尻校長が必死に制止するが、緊迫はとけない。そのとき、当時生徒主事の任にあった岡野鑑記教授が、校長に代わって台の上にかげあがり、応援団にむかって叫んだ。

「よろしい、君たちの気のすむまで、思う存分になぐれ。しかし、なぐるのは選手たちじゃないぞ。こんな結果になったのは生徒主事たる僕の責任だ。だから選手の代わりにこの僕をなぐり殺してくれ！」教授はこう言いおわると、合をとりおりで応援団のまえに立ちふさがった。この勢いにまれて、さすがの猛者連中も後退を開始し、危機は回避されたのであった。優勝を予想してグラウンドにはこぼれていた四斗ダルは、険悪な空気を察

ンス語は創立当初からの時田清教授、ドイツ語は小谷恵一郎助教授が昭和八年急逝したあと、九年から山中静三教官が担当、また、支那語は開校当初の清水、川添両教官につづいて大正十五年（昭和元年）から武田武雄助教授が教え、それぞれ新界に聞こえたすぐれた先生がたであった。英語の日本人教官は、創立当初から、河村重治郎、西村桐、伊東弥の三教授と、英文コレスポネンス、略称コレボン担当の光井武八郎教授。西村教授は中学校以上の正規の学校で学んだ経歴を持たず、各段階の検定試験を突破して実力を養ってきた、たぐいまれな独学力行の人であったが、当時、大正時代から昭和初期にかけて日本を代表する国際人でもあり、思想家でもあった新渡戸稲造博士に私淑し、後年日本の能および俳句の英訳をし、漢書を返り点なしで素読する和魂洋才の士でもあった。河村教授は、研究社の『新英和大辞典』の編集主幹であるほか、数種の辞典の編纂者として著名で、エンスaikロペディアともいわれた博覧強記の人。伊東教授はスタンフォード大学出身のアメリカ英語の達人、会話にも練達し明治大学教授から横浜高商教授に転じてきた人。創立当初の学生たちが、大学からでは格下げじゃありませんか、というところから「私大の教授よりも官立の専門学校のほうがうわ手だよ」と答えて、戦後まで高商に在勤し、フランス語の時田教授とともに、国大昇格後の教授にも残った。

西村教授は、当時最高級の英語研究雑誌であった『カレント・オブ・ザ・ワールド』（Current of the World）に毎号執筆して、その実力の高さが評価されていた。また、コレボンの光井教授の著になるかなり部厚な教科書は、古本屋へ持っていても高く引き取られ、質屋でもいい質草になったところから、飲み代にしてしまった学生も多い。だが、卒業後会社や銀行に就職してみるとその必要にせまられ、あわてて探しまわって買いもどし、その名著たるゆえんをあらためて認識させられたものであった。高商創立の当初から、毎年各国語の外語劇が盛大に挙行され、高商名物のひとつになりえたのも、こうした一流の教官陣の指導のもとにおける、日ごろの研鑽

の賜ものであった。昭和十一年ごろには、対高工野球定期戦を控えた恒例の野球部選手激励会で、激励演説を英語やドイツ語でまくし立てる学生もいたほどである。昭和十六年四月以降を除いて、各学年はA、B、Cのクラスにわかれ、各クラスは一年から三年までを通じて西村、河村、伊東の三教授のうちのひとりに、一貫して教えるを受けるシステムだったことも、ひとつの特徴に数えることができる。

三教授のなかでとくにユニークだったのは、西村教授だった。レッスン中は絶対に日本語を使わせない。英語を英語で教える、いわゆるダイレクト・メソッド（direct method）と呼ばれる、当時としては先駆的な教授法であった。「子供が日本語を習うのに、日本語で教わっているではないか。英語もそれと同じこと。英語を英語で教えるのが合理的なのだ」というのが同教授の持論。学生にオックスフォードの英々辞典を使わせ、英語で考え——*thinking in English* 英語で語ら——*speaking in English* ことを訓練した。昭和十二年十月三十一日には、東京神田の一橋講堂で開かれた英語教官会議に、担任の二年B組の学生三十五名を引き連れて参加し、このダイレクト・メソッドのデモンストレーションをやってみせた。ただし、授業中は日本語を使わせない、あるいは、先生も日本語を使わないといっても、ただひとつの例外があった。学生がまちがいをやらかしたり、答えられないでマゴマゴでもしていると、たちまち「バカ、バカッ！ 中学校で英語やってきたのかッ！」という先生の怒声が、まぎれもない日本語で頭上に飛んできたことである。西村教授も先年世を去ったが、同教授に教わった学生たちは、いまでもこの「バカ、バカッ！」をなつかしんでいる。

当時新渡戸稲造博士に私淑していた同教授は、ある学生に大きな影響を残した。十回生のS・Rは同教授の教えを糸口として在学中に、新渡戸博士の『武士道』『東西相触れて』『内観外望』など英文、和文の著書や『新渡戸稲造伝』を読破、その国際性豊かな、世界的視野を持った日本人としてのあり方にすっかり傾倒した。そして、



横浜港の出船

著書を読むだけではあき足りずに、博士の未亡人エリキン・トン夫人に直接手紙を送り、ついにその許しをえて、昭和十年四月のある日、東京小石川小日向台の博士の遺宅を訪問した。そして、未亡人から博士の遺跡をいろいろ聞いたうえ、生前のままに残されていた書齋も見せてもらって、感激をあらたにしたのであった。S・Rは卒業後商社マンとなって、長い海外生活を送るようになるが、西村教授を媒介とした新渡戸博士の教えは、その後も長くかれの人生の大きな支えとなった。

7 国際性の伝統 その二

— 国境を越えた人間交流 —

戦前の学生たちは日曜日など、伊勢佐木町をブラついて、日の出町から野毛山公園に出る、あるいは桜木町方面に向かって紅葉坂をのぼり、幕末開国の断を下した大老井伊掃部守の銅像が港のほうをにらんでいる掃部山公園を散歩する。さらに歩くのが好きなものは、根岸台の尾根を伝って山手町の方に降り、外人墓地进行眺めてエキゾチックな気分になり、そのあと、山下公園まで歩いてひと休み、といったコースがあった。山下公園では、マドロスパイプなどをくゆらせながらやってくる外国の船員をつかまえて、さっそく英会話の実験を試みる。ど

こからきたか、日本ははじめてか、印象はどうだ、といった他愛もない話だったが、そこには横浜ならではのインタナショナルなムードがあった。相手の英語があまりにもブローケンなので、驚いてきいてみると、英語にはあまり関係なく育ったラテン系小国の船員だったりしたこともある。

十一回生のS・Hは二年生だった昭和十年の一時期、クラスメートの七、八人と語らい、毎週土曜日の午後、東京から女性宣教師のミス・レモンを、磯子にあった仲間の家に招き、バイブル・クラスを開いていた。ミス・レモンは当時三十歳前後の年配になっていたが、美しい婦人で、毎回二時間ぐらい英語でバイブルの話をきいたあと、近くの三溪園にみんな散歩にいったり、あるいは、伊勢佐木町に出て夕食をいっしょに食べたりした。時にはミス・レモンがヴァイオリンをたずさえてきて、見事に弾いてきかせてくれた。仲間のなかには磯子海岸で彼女の洗礼を受け、本もののクリスチャンになったものもある。そうしたバイブル・クラスは、S・Hたちにとって、楽しい、そして胸ときめくひとときでもあった。しかし、やがてミス・レモンの離日する日が来た。彼女

の乗ったエンプレス・オブ・エイシア号が横浜港の桟橋を静かに離れはじめたとき、見送りにきたS・Hら一同は、期せずしてバイブル・クラスのたびに合唱した賛美歌を歌い出していた。

I will make you fishers of men

Fishers of men

I will make you fishers of men

if you follow me

7 国際性の伝統 その二



山下公園

最近の新聞報道を眺んで、若いあなたたちの頭の中に、若干の混乱や困惑が起きつつあることはよくわかる。私自身の心の中にも、いいしれぬ困惑が起きている。ただ、私は日本政府に招かれて、すでに四年近くも、この国のカレッジで教壇に立っている。日本および日本人についての理解も、少しはあるつもりだ。あなたがたとの友情、人間的な交流が、私に与えた喜びはかりしれないものがある。どうか、どんな事態になっても、

「歴史の宿命か何かは知らないが、いま、あなたたちの国日本と、私どもの国イギリスは、必ずしも好ましい状態にない。まことに悲しいが、これは、私個人の力でどうにかなる問題ではない。しかし、ひとりひとりの人間同士が、理解し合い、信頼し合うことによって、このような悲しむべき事態も、いずれは好転する日が来るであろう。その日がいつであるかについても、私は予言できない。しかし、人間と人間との相互理解と信頼が持つ力だけは、いつまでも信じているし、私はこれからも、これまでと同じように、この国の人びとを正しく理解する努力をつづけたい。」

そんな時世だった昭和十三年六月ごろのある日、三年生の授業で、始業のベルとともに教室に入ってきたスレッシャー教官は、学生たちが異常にざわついているのに気がついた。日本の中国侵略拡大に対する、米英両国のきびしい批判が報道された日であったかもしれない。学生の何人かがあまり意味のない質問をしてみたり、数人が同時に発言したり、互いに私語をかわしたりで、いつもにない騒然たる雰囲気であった。教官はさいしょの五分間ぐらい、学生の質問に回答していたが、やがて口を閉ざし、学生たちの動きがやや静まるのを待って、再び口を開いた。そして、終業のベルがなるまで約五十分間、例のとつとつとした口調で話した内容は、およそ次のようなものであった。

を突っ走っていったのである。

歌声の高まるにつれて、甲板に立ったミス・レモンはついに感きわまったか、ハンカチでその美しい顔をおさえてしまった。S・Hの胸にもジンとこみ上げるものがあつた。

昭和十年四月着任したスレッシャー教官は、若くて馬力もあり、非常に熱心な教師であつた。その端麗な容姿とノールな挙動は、学生にとつて、ある種の畏敬と憧憬のまともであつた。同教官はけつして能弁ではなく、むしろとつとつとした口調で、典型的なキングス・イングリッシュを話したが、時おり、ロンドンっ子特有の「H」をサイレントにするなまりもまじつたせいか、一般の学生にはきき取りにくく、「カメロンやコースの英語はわかるんだが……。スレッシャーではまったく自信喪失だよ」とこぼす学生もあつた。そんなスレッシャー教官をチェアマンとして、昭和十年の秋ごろにはイングリッシュ・ディベiting・サークルが組織され、十一月八日には「イタリア、エチオピアいずれにつくべきか」をテーマに、学生の討論会が開催された。この前月、ムッソリーニに率いられるファシスト・イタリアがエチオピア領に侵入し、翌年五月にはその併合を宣言するにいたる時期であつた。学生のディベitingは、賛否両論を想定した模擬討論会式のものであつたが、すでに日本が国際連盟を脱退して二年有半をすぎたそのころ、富士見ヶ丘の学園にはなお、こうしたホットなテーマで、国際連盟総会を再現するムードがみちあふれていたのである。

しかし、学園をとりまく情勢はしだいにけわしさを増し、この討論会が行なわれていたころ、北支侵略を急ぐ日本軍部は、カイライ政權である冀東防共自治委員会(のち自治政府と改称)を北支に樹立し、英国はじめ列強の経済的利益と正面から対立するにいたる。さらにその後、二・二六事件(昭和十一年二月)、ナチス・ドイツとの日独防共協定成立(同年十一月)を経て、支那事変勃発(十二年七月)とともに中国における戦火はますます拡大、次いで国民精神總動員運動開始(同年九月)、国家總動員法成立(十三年三月)と、日本はひたすら軍国主義化の路線



南京占領の報道

う具合になっていった。そういう曲がりカドの角度の非常にきつい時代に、私たちはあったという印象が強い。」高商十二回生（昭和十三年三月卒業）のK・Tは以上のように回想している。

ブラバンを持ちたいというのが、以前からの高商生たちの念願であった。毎年、浜の早慶戦（対高工野球定期戦）になると、高商側は、市内のお寺や神社から大太鼓、小太鼓を借り集めて、高工のブラスバンドに対抗しなければならなかったことはさきにも述べた。そこで十二回生たちが三年に進級した昭和十二年の春、野球定期戦をめざして苦心の末に、ようやくブラバンが誕生したのだった。そのブラバンが早速、戦意高揚の用向きに使われるようになっていったのである。

その前年、昭和十一年の二月に二・二六事件が起こっていた。陸軍の反乱部隊が重臣、

私どもの交流のキズナが温かく保たれることを祈りたい……」

彼の英語を十分に理解できる学生は少なかったはずだが、学生たちは、教官の顔つきや語調から発せられる真剣な気合いに打たれて、静まりかえっていた。そして、終業のベルとともに立ちあがった教官を、全員の静かな拍手が教室から送り出した（『富丘金報』第三十五号、高商第十三回卒・深山一郎「スレッシャー先生のこと」による）。

昭和十五年末、情勢の緊迫化とともに辞任、帰国したスレッシャー教官は、終戦直後連合軍のオフィサーとして東京に駐在、その時期のある日、富士見ヶ丘の学園を訪れた。戦前あわただしく帰国したさい、横浜の官舎に残っていた書籍類を確認するためであったが、そのとき母校の助手となっていた、同教官の教え子のひとり十六回卒業生長洲一二（のち国大教授）が応待し、右の書籍類が完全に保管されているのがわかると、非常に喜んでこれを全部学校に寄付して帰った。あのとときスレッシャー教官が語った「ひとりひとりの人間同士が、理解し合い、信頼し合う」ことのできる平和な日もとるまでに、七年あまりの歳月を要したことになる。

8 学園の緊張加わる

世の中も学園も「私たちのときにガラリとかわったのです。昭和十二年七月支那事変が起こって、戦火はたちまち上海から北、中支に波及、学園では七月に、教線の小白教官、助教授になったばかりだった越村先生（のちの国大教授）、支那語の武田助教授らが、あいついで応召した。越村さんは陸軍少尉の軍服もりりしく出征していたことを覚えている。その年の秋に行なわれた国民精神総動員週間での神社参拝、さらに十二月の南京陥落祝賀行進などで、私たちがこの年からはじめてつくったブラスバンドが、その都度先頭きってパレードするとい



祝戦勝の行進 プラバンを先頭に

閣僚を襲い、高橋は清蔵相、齋藤寅内大臣、渡辺錠太郎陸軍教育總監らが反乱軍に射殺されたものだが、珍しい大層のこの日、卒業を控えた高商十回生たちは、富士見ヶ丘生活最後の試験最中だった。事件のニュースに驚きながら、「今日の試験は中止だよ、きっと」などと、いつの世にも試験というものがきらいな学生たちの話はその間に落ち着いたが、結局、統計学の森田優三教授の試験を、予定どおり受けたことを覚えている。とまれ、このような血なまぐさい事件を背景に軍部の発言は一段と強まり、ついに翌年七月、北京郊外盧溝橋の戦火から支那事変が拡大していった。

支那事変からはじまる「日中戦争は、満州事変とは比較にならない本格的な戦争であった。(中略)南京占領までの第一段作戦において、(中略)一万八千の戦死者と五万二千の負傷者を出した」(遠山茂樹ほか著『昭和史』)。十二年九月には「臨時資金調整法」、「輸出入品等臨時措置法」が成立、金融、貿易の面から軍需産業重点の方針が明確にされ、同じ月から政府は国民精神総動員運動を開始、十一月には、関東、東北地方で初の防空演習が実施された。翌十三年三月には「國家總動員法」、「電力國家管理法」が成立、十三年度から物資動員計画も開始されて、国民生活のすべての部門を政府の統制下に置く、いわゆる國家總力戦のルールが敷かれていったのである。ふみよ、東海の空あけて……にはじまる「愛國行進曲」のレコードが昭和十二年に十萬枚売れ、国民精神総動員運動の標語として、国民

に節約を呼びかけた「パーマネントはやめましょう」「一汁一菜」といったポスターが、街頭いたるところに貼られ、めくらされる世相になっていった。

こうして富士見ヶ丘の学園でも、十二年の四月には、岡野鑑記教授を部長、応召前の越村助教授を副部長としていた講演部に「大陸經濟研究会」が設けられ、満州、北支における政治、經濟、貿易、社会状態などを研究することにし、毎月一回以上討論会を開催するという計画も組まれて、中国大陸への学生の関心が高まっていく。そして、十月中旬の一週間は国民精神総動員運動週間にあてられた。その第五日は「神社参拝および殉国勇士をたたえる日」。その日午前、全校学生は校旗と、その春編成されたばかりのプラバンを先頭に、進軍の歌を高く唱しつつ、伊勢佐木町をパレードして伊勢山皇太神宮に参拝したのであった。「秋雨しとしと降り、いっそう厳寒味を加う」と『高商学報』第八十二号(昭和十二年十月二十五日発行)は伝えている。すでに満州事変中の昭和八年、第六回生のひとりが北満で戦死、また十二年の八月にも、やはり六回生のひとりが支那事変下さいしょの戦死者となって、戦争と死との問題が、若ものたちの日常に大きなかげりを投げつつあった。

強國週間の最終日は「非常時心身鍛練の日」。四千メートルのマラソンが行なわれた。この日午前、全校学生はまずグラウンドを一周して校門を出、前里町を走って左折、三春台をのぼり、そこから長懸保土ヶ谷を回って学校へもどる、というコースである。秋雨がしょぼつく異常な寒気のなかを、全校約五百の学生が走りだし、田尻校長もさいしょの運動場一周に参加、生徒主事だった岡野教授は、全コースを学生と一しょにかけ抜いた。ラグビーをやっていた十三回生のY・Cは「われわれは運動をやっていたので、タバコを吸いながら走れたが、相当の落伍者が出た」と回想している。ふだん本ばかり読んでいた連中には、相当こたえる「心身鍛練」だったようだ。この年秋から富士見寮の寮祭も中止。昭和三年の開寮以来、市民にも開放されて高商名物のひとつにな

ってきたこの恒例の行事も、歴史のかなたへ追いやられ、かわりに寮生の防空訓練が実施された。

そうしているあいだにも、宣戦布告なき中国との戦争はしだいに拡大、この年十二月十日、日本軍は南京を占領した。占領にさいし、日本軍が多数の婦人子供を含む住民の大虐殺事件を起こし、戦後大きな問題となった南京入城であった。その翌十一日横浜では、高商、高工、市立商業専門（現市立大学）、横浜専門（現神奈川大学）、および関東学院（現関東学院大学）の市内五専門学校学生による「南京陥落祝賀大行進」が行なわれた。この日午前十時、集合場所の市立商業専門学校——通称Y専のグラウンドに集まった約三千の学生たちは、高商のプラバンを先頭に隊伍を組んでY専を出発、伊勢佐木町を経て、横浜公園広場まで行進した。さらにその夜行なわれた提灯行列にも、高商学生百数十名が、配属将校佐分利大佐の引率のもとに参加し、やはりプラバンが先頭に立って、伊勢山太神宮に参拝した。野球定期戦をめざして苦勞の果てにできあがったプラスバンドが、このように、活用されようとは、高商生のだれもが夢にも予想しないことだった。

このような情勢の進展は、反戦的なインテリに対するきびしい抑圧を伴った。十二年の十一月には矢内原忠雄東大教授（戦後、東大総長）が反戦を理由に学園から追放され、十二月には人民戦線事件第一次検挙が行なわれて、山川均、荒畑寒村、猪俣津南雄、大森義太郎、向坂逸郎、鈴木茂三郎、黒田寿男といった左翼運動家たちが獄舎につながれた。さらに翌十三年二月には、人民戦線事件第二次検挙として、大内兵衛、有沢広巳、脇村義太郎、美濃部亮吉らいわゆる「教授グループ」を中心に、全国で三十八名の人たちが逮捕され、同年十月には、これまでに自由主義者としてマルクス主義を批判してきた河合榮治郎東大教授が『ファシズム批判』などその著書四冊の発禁処分を受けて教壇を追われたうえ、出版法違反で起訴されるにいたる。共産党の弾圧にはじまり、左翼社会民主主義者などの抑圧に及んできた戦争への道は、ついに自由主義や人格主義の息の根も止めようとしていた。

第三章のための資料

年表——昭和七年（一九三二年）～同十二年（一九三七年）

年	月・日	本校 関 連 事 項	月・日	社 会 経 済 状 況
3	3	本科第六回卒業式（卒業生一四四名、貿易別科第三回卒業式（卒業生二一名）を挙行	1・28	上海事変起こる
4	4	本科第九回入学式（入学者一五八名、貿易別科第四回入学式（入学者二八名）を挙行	2・9	井上準之助前蔵相暗殺さる
4	4	学科課程の第一次改訂を当年度から実施	3・1	満州国建国宣言
6	4	井上龜三教授満州へ出張	3・5	岡塚啓三井合名理事長暗殺さる
6	6	下津屋俊夫助教授、第十回オリンピック大会（ロスアンゼルス）に出場（体操監督）のため渡米	3・11	「二人一殺」の血盟団発覚
7	6・30	下田礼佐教授、中南米実情調査のため出張	5・8	「天国に赴く恋」の坂田山心中
7	7・9	対東京商大専門部定期戦、二カ年で中止と決定、両校委員多摩川原で優勝旗授却	5・15	五・一五事件起こり、犬養首相、陸海軍将校に射殺さる
7	7	朝香宮殿下来校、軍事教練視察	6	日本共産党三二年テーゼ発表
11	11・17	第一回校内体育大会開催	6・29	警視庁に特別高等警察部（特高）設置
11	11	プロゼミナールに三グループ制（Aグループ私経済学、Bグループ国民経済学、Cグループ法律学）採用	7	ドイツでナチス第一党となる
12	12	小谷恵一郎助教授（ドイツ語担当）逝去	8・14	第十回オリンピック（ロスアンゼルス）で日本水泳隊圧勝
			9	満州国承認、日滿議定書調印
			10・6	東京大森で銀行ギャング事件起こる
			10・30	新生共産党大檢舉

昭和		10		年			
7・1	4・1	1・23	11・1	10・	7・	7・1	5・28
清費組合が高商裕衣を発売(一反一円五十銭)	古館市太郎教授(会計学担当)が大倉高等商業学校校長として転任	小宮山敬保教授(会計学担当)逝去	復活第一回大運動会を挙行	図書目録を刊行	学生課が学生の生活調査を実施	本校所在地(中区南太田町)が中区清水ヶ丘と改称さる	専門学校長会議で文部大臣が国体明徴の徹底を強調
12・21	11・18	10・17	12・26	12・26	12・26	12・26	12・26
開校十周年記念外語劇大会を開催	開校十周年記念行事として近県中等学校各種スポーツ大会を主催	開校十周年記念行事として近県中等学校各種スポーツ大会を主催	美濃部達吉博士、天皇機関脱につき貴族院で弁明	ドイツ再軍備宣言	衆議院、国体明徴を決議	美濃部博士不敬罪で告発され(7日)、その著『憲法提要』等発禁に(9日)	第七回コンメンテルン大会人民職線職務採択政府、「国体明徴」を声明、各学校にこれを訓令
12・26	12・26	12・26	12・26	12・26	12・26	12・26	12・26
ワシントン条約を廃棄	日本初の職業野球団「東京野球倶楽部」誕生	日本初のプロ野球戦・巨人対金鷺行なわる総選挙で社大党退出	二・二六事件起こる	二・二六事件起こる	二・二六事件起こる	二・二六事件起こる	二・二六事件起こる

第3章のための資料

必修学科目		選択学科目		第一学年		第二学年		第三学年	
英	国	体	修	第一学年	第二学年	第一学年	第二学年	第一学年	第二学年
語	語	育	身	第一学年	第二学年	第一学年	第二学年	第一学年	第二学年
文	文	文	文	文	文	文	文	文	文
法	法	法	法	法	法	法	法	法	法
語	語	語	語	語	語	語	語	語	語
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五

○学科課程の第一次改訂

本校創立当時制定の学科課程が羅列主義で基礎学と専門学とのあいだに体系が立てられていないうらみがあつたので、これを是正すべく、昭和七年四月から学科課程の改訂が実施された。改正の主眼点はつぎのとおりである。

一、学科の体系的配列、第一学年では基礎科目に意を注ぎ、中学、商業出身者の知識の平均化をより徹底させ、第二学年では主として総論を、第三学年で特殊科目を講ずることにした。

二、第三学年は選択科目を主体とする。すなわち約二十の提示科目のうち、各自十三を選択させる。

三、ゼミナール重視、第二学年に週一時間のプロゼミナールを設け、もっぱら原書読解に充て、第三学年ではこれを正課として週二時間を充てる。プロゼミナールからゼミナールへの移行のさいは学生の自由変更を許すたてであったが、実際上はまったく変更なく、学生は二カ年間を通じて同じ指導教官に属していた。改正学科課程表左のとおり。

8・2	11・6	11・7	11・	12・11
田尻常雄校長、東大講堂で開催の世界教育会議で講演 総合文化大会開催	全校体力検査実施、田尻校長、教育審議会臨時委員に 就任	南京陥落後行進と提灯行列に参加		
提出 南京占領 人民戦線第一次検査、山川均ら四百人検査さ る	12・15	12・27		
絹製品等スフ混用規制公布				

昭和12年	昭和11年	年	年
3・3 文部省が小冊子「団体の本義」を発行、教育関係者に頒布 森田三三教授(統計学担当)、在外研究のためオーストラリアに出发 田尻彦幸助教授(商品学担当)逝去 大陸経済研究会設立 水泳プール竣工、プール開き行なわる 渡辺輝一教授、満洲製古へ出張 越村助教授、武田助教授、小白崎師ら応召 防空警備規程を制定	11・4 文部省が大学・高専校に日本文化講座を開催、本校の第一回として村川堅固京大教授の講演「歴史的に観たる日本文化の使命」行なわる 金日本体操祭で本校チーム賞状を受く 田尻校長遠征祝賀会開催 永井澄東大教授講演「日本民族」行なわる	11・26	12・
2・22 軍備増強で、東京株式市場取引高一四三万株(創業以来の最高)を記録 近衛内閣成立 盧溝橋事件、日中戦争開始 文部省に教務局設置(思想局廃止) 戦火上海に波及 国民精神総動員運動開始 企画院設置 関東・東北地方、初の防空演習実施 矢内原忠雄東大教授、反戦的筆禍事件で辞表	3・24 メーデー禁止さる 軍部大臣現役制復活 左翼文化団体検査 スペイン内乱起る 第十一回オリンピック(ベルリン)、二百メートル平泳で前畑秀子選手優勝 日独防共協定成立 人民戦線運動弾圧、千余人検査 プロ野球初の公式戦で巨人軍優勝 西安事件起こる	7・10	5・28

第3章のための資料

商業地理	外国経済事情	財政学	統計学	商業通論	商業簿記	銀行簿記	工業簿記及原価計算 英文簿記タイプライティ	会計学	経営経済学	交通論	保険論	金融論	
								会計監査		海運 陸運及空運	海上及火災保険 生命保険	国際金融論 銀行経営論	
				(中)二	(中)二	(中)二							
				(中)二	(中)二	(中)二							
二								一	二	一	一	二	
二							二	一	二	一	一	二	
	一	二	一					二		(D)	(D)	(D)	(D)
	一	二	一					二					(D)

英会語	数学	高等数学	商業数学	珠算	理化学	工学	近世史	法学通論	民法	商法	経済学原論	商業政策	商業史
				珠算						商事関係法 国際法 憲法	景気 経済学史		
(商)三	(中)二	(中)二	(中)一	(商)二	(商)二	(商)一	(商)一	四	二		二		
(商)二	(中)一	(中)一	(中)一	(商)二	(商)二	(商)二	(商)二	二	二		二		二
三		一	一						二		二		二
三									二				二
(D)										(D)		(D)	二
(D)				(一)						(D)	(D)	二	二

充 買 市 場 館	取 引 所					
商品学及商品実験						(1)
内外商業実験						(1)
	経済心理					(1)
	社会心理学					(1)
研究指導	社会政策					(1)
特別講義						(1)
合 計		三四	三四	三四	三四	二五

備考

- 一、第一学年ニ於テ(函)印ヲ付シタルハ商業学校出身者及之ニ準ズル者ニ(中)印ヲ付シタルハ其ノ他ノ者ニ之ヲ限ス
- 二、通算科目ハ第三学年ニ於テ第一学期十八時間ノ中八時間ヲ第二学期十九時間ノ中九時間ヲ選修セシム
- 三、其ノ他ノ外国語ハ支那語・英語・仏語・西語・獨逸語・和語・國語ニツキ其ノ一ヲ選修セシム但シ一旦選修シタルモノハ半進改選スルコトヲ許サズ又選修科目ノ又ハ学校ノ都合ニ依リ之ヲ欠クコトアルベシ

○開校十周年記念行事(昭和九年)

主要行事日程左記のとおり。
十月十四日(日) 同窓会主催物故者慰霊祭、同窓会大会
十月二十一日(日) 記念式、表彰式、名士講演会(演題と講師・「国際関係の推移と我國民の覚悟」特命全權大使出淵勝次氏、「日本民族の進出に就て」衆議院議員安達謙

藏氏)、提灯行列等
十月十七日(水)十一月十八日(日) 近府県中等学校各種スポーツ大会等を開催
十二月一日(土)二日(日) 外語劇大会
○開校十周年記念式(昭和九年十月二十一日)における田尻校長式辭と松田文相祝辭

田尻校長式辭(要旨)

私が本校校長として赴任したのは大正十二年十一月末であつた。当時横濱は焦土と化し現在のこの場所から見ると一面の焼野原であつた。自分はこれを見て横濱復興のために努力しなければならぬと感じた。大正十三年四月開校し横濱商工のバラックの一部を借受け、そこで授業をする有様であつたが、一年経て現在の場所へ移り、生徒控室と武道場を教場として使つた。その三年目に本館が出来上つた。今日の市の復興と校舎の建築とを見て誠に今昔の感に堪へぬものがある。

さて本校の教育方針は信頼するに足る人物を養成することにある。幸い現在まで八回千百人の卒業生を出し、本校の教育方針によって孰れも社会方面で大いに活躍してゐることは欣快とするところである。又貿易別科の卒業生も海外において活躍してゐる。本日は意義ある十周年記念日に際し文部大臣閣下を始め衆議院の閣下各位の御臨場を仰ぎ誠に感謝に堪へぬところであるが、我々は今後とも自重し協力一致して過去十年の光輝ある歴史を傷つけないようにして行きたい。

文部大臣祝辭

横濱高等商業学校ハ開校十周年ヲ迎ヘテ茲ニ其ノ記念式ヲ舉行セラルルニ當リ一言祝辭ヲ述ブルハ余ノ欣快トスルトコロナリ

惟フニ本校ハ大正十二年恰モ我カ産業貿易ノ大ニ伸長ヲ要スルノ秋ニ際シ我カ國貿易港トシテ極要ノ地位ヲ占ムル横濱ノ地ヲトシテ創立セラレ爾來殆々トシテ發展向上ノ一路ヲ辿ルコト正二十年此ノ間卒業生ヲ出スコト千有餘人校運今日ノ隆昌ヲ致セルハ慶賀ニ堪ヘズ 抑々十年ハ事物更新ノ一転機ナリサレバ此ノ機会ニ於テ既往ノ成績ヲ顧ミ式典ヲ挙ゲテ其ノ慶ヲ共ニシ更ニ人心ヲ新ニシテ一段ノ躍進ヲ將來ニ期スルハ誠ニ意義深キ好挙ト謂フヘシ 今ヤ内外事滋クシテ學園繁盛ヲ要スルノ時機ニ際会ス職員各位生徒諸子ハ其ノ責任ノ容易ナラサルヲ自覺シ今日ノ慶典ヲ契機トシテ奮勵精進々々其ノ使命ノ達成ニ邁進セラレンコトヲ望ム

昭和九年十月二十一日 文部大臣 松田 深治

○開校十周年記念事業

一、圖書目錄作成——記念事業のひとつとして昭和八年末から準備に着手、同十年十月印刷完了した。全巻六三〇ページ、約一万四千冊の和漢洋蔵書を収載している。この目錄は関係諸学校、官庁、圖書館に寄贈された。

二、プール建設——昭和五年に学友会の一部として水泳部が創設されたが、自校プールを持たなかつたため、同九年六月ごろから学友会と同窓会とで、それぞれ別個にプール建設案が出され、連絡協議の結果、同年七月に、長さ二十五メートルのプ

ール建設計画と概算予算、その分組を次のとおり決めた。

同窓会寄付 二千元
消費組合寄付 千五百円
学友会基金 二千元
生徒寄付 五百円
教職員寄付 千円
計 七千円

しかし、その後建設資材の価格高騰のため総工費を一万二千余円に増額、東京商科大学嘱託白木政太郎氏を設計監督に、水上連盟飯田光太郎氏を建設顧問に委嘱して、長さ二十五メートル、六コースのプール建設を進めた。総工費がふえたに伴い、分組も左記のように増額変更された。

同窓会寄付 三、五〇〇円
消費組合寄付 一、五〇〇円
学友会負担 七、六三八円七三銭
計 一二、六三八円七三銭

学友会はその基金のほか、昭和十二年度在校生約五百名が二円ずつ寄付して合計千円、その後の年度の新入生からも資金を徴収し、これに教職員の寄付を加えて七千六百余円を負担することにした。かくて、このプールは昭和十二年五月三十日竣工、プール開きが行なわれた。

三、記念論文集刊行——『商学』第十五、十六両号を記念論文集にあて、開校記念式の日に登刊された。全教官執筆という

企画で、第一部経済商業法律諸学篇、第二部文学篇の二部に分け、ほかに外人教師の英文論稿を加えて、六二二ページの大冊となった。掲載論文の目次は次のとおり。

第一部

白人の人口減少とその影響 下田 礼佐
法律行為の解釈 大竹 縁
商品保存問題 南郷 康博
海上保険に於ける填補の種類 岩本 啓治
人間の自然的人間学的性格と「計画学問」の問題 渡辺 輝一
燃料問題に対する一考察 田尻 彦幸
貸借対照表論の推移と標準貸借対照表 古館市太郎
勢力価値学説 井上 鑑三
権利行使の方式 不二門電観
英国の減価基金制度 岡野 鑑記
本邦移植民の情勢と其将来の発展策 福田 要
事業管理への補助としての標準減価相の観察 小宮山敬保
我國製紙業における産業統制 井上 鑑三
イギリス重商主義学説と其社会的背景 徳増栄太郎
価格分散と景気変動 森田 俊三

第二部

マヤの考古学から見たアトランティス大陸の

仮説 岡田 峻
コーヘンの論理学における体系概念 富成喜馬平
ディケンズの悪人 伊東 弥
Sales Letterの書き方に就て 光井武八郎
Otto Ludwigs Meisterwerke 山中 静三
新渡戸博士著「武士道」の研究 西村 綱
取残された問題 河村重治郎
外国に於けるフランス語 時田 清
Ecstasy in Poetry by J. T. I. Bryan
Some Factors in Japan's Trade Expansion by R. E. M. Cameron

○横浜経済研究会

学外との連絡による研究団体として「生糸経済研究会」(第二章のための資料参照)とならび、「横浜経済研究会」(YKE)が、岡野鑑記教授の主宰により昭和八年十一月結成された。実務家と理論家との接点により横浜経済の発展を助長しようという目的で、会員約百名を擁し、昭和十年前後から活発な活動をつづけ、講演会、討論会等を隔月開催していたが、岡野教授の満洲赴任(昭和十三年)により活動を停止した。

○準戦時下の成人講座

昭和二年はじめて文部省から成人講座の開設を委嘱された本

校は、以来隔年これを開講してきたが、ことに昭和十四年以降は、時代が準戦時体制へと移行したため、同講座も左記のごとき時局の色を濃く映したものとなった。

昭和十一年度 非常時経済問題講座

政治経済上より観たる太平洋問題 下田 礼佐教授
貿易統制の諸問題 徳増栄太郎教授
馬場財政と税制改革 岡野 鑑記教授
産業統制と電力国営 井上 鑑三教授
非常時と資本家 井上 鑑三教授
非常時経済と金融統制 森田 俊三教授
日本精神と新興日本の使命 富成喜馬平助教

昭和十二年度 戦時経済講座

支那事変と国民精神総動員 田尻 彦雄校長
貿易統制とその影響 徳増栄太郎教授
日本の工業経済 井上 鑑三教授
統制経済の原理 井上 鑑三教授
大陸政策と生産拡充 岡野 鑑記教授
満洲国の経済建設状況 渡辺 輝一教授
支那経済事情 下田 礼佐教授

○日本文化講座

準戦時体制に入るとともに、思想対策からさらに一進して日本文化の高揚をめざした文部省は、日本精神と「団体の本義」

昭和十一年十一月	歴史的に觀たる 日本文化の使命	文博	村川	堅固
昭和十一年十二月	日本民族	医博	永井	澄
昭和十二年 六月	日本人に選れ	文博	平泉	澄
昭和十二年 六月			本間	俊平
昭和十二年十一月	日本精神と日本音楽		田辺	尚雄
昭和十二年十一月	戦争と經濟 海軍主計中將		武井	大助
昭和十二年十二月	社会機構と生物學			

京大教授 川村多爽二

昭和十三年	一月	日本美術の海外進出について	英校教授	矢代	幸雄
昭和十三年	五月	身分の話	文博	幸田	成友
昭和十三年十一月		航空機について	理博	和田	小文
昭和十三年十二月		現下の外交事情	法博	米田	実
昭和十四年	二月	日本産業の精神		膳	桂之助
昭和十四年	六月	戦うものの心境	陸軍少将	桜井	忠温
昭和十四年	十月		文博	塩谷	温
昭和十四年十二月		東洋文化と西洋文化	法博	三浦	新七
昭和十五年	一月	支那事変について	法博	下村	宏
昭和十五年	六月	日本文化と亜細亞文化	文博	中村	孝也
昭和十五年	十月	全体主義と個人主義	経済博	井藤	半弥
昭和十六年	一月	日本の気象と國民性	理博	藤原	映平
昭和十六年	六月	国防國家の經濟政策			
昭和十六年十一月		国防と科學	東南大教授	赤松	要
昭和十七年	一月	儒教と我國の徳教	理博	仁科	芳雄
昭和十七年	六月	南方經濟の諸問題	文博	諸橋	徹次

昭和三十七年	十月	南方の民族文化	文博	宇野 円空	法華津幸太
昭和十八年	一月	日本の人口問題	医博	古屋 芳雄	
○開校十周年当時（昭和九年十月）の概況					
一、職員					
（担当）					
学校長	田尻 常雄	教授	岩本 啓治	下田 礼佐	西村 綱
保険学、商業通論、内国商業実務、研究指導		商業地理、海外経済事情、南米経済事情、研究指導			
英語		商業簿記、原価計算及工業簿記		古館市太郎	南植 康博
商品学、商品実務、工学、研究指導		法学通論、民法、商事関係法、國際私法、研究指導		不二門電親	
商業英語、商業通信		英語		光井武八郎	
銀行簿記、計理学、簿記、研究指導				河村重治郎	
経済学史、商業史、経済大要、近世史、研究指導				小宮山敬保	
仏蘭西語				徳増栄太郎	
				時田 滑	
英語				伊東 弥	

民法、商法、國際公法、研究指導	大竹 綠
交通論、商業政策、売買市場論、研究指導	波辺 輝一
數學、高等數學、商業數學	小幡 孫二
財政學、工業政策、植民政策、研究指導	岡野 鑑記
商工經營、取引所論、商業通論、研究指導	井上 龜三
經濟原論、景氣論、研究指導	井上 鑑三
金融、外國為替、生命保險、統計學、研究指導	森田 優三
体操	下津屋俊夫
生徒主事	
(遊)	下田 礼佐
(遊)	南種 康博
	岡野 鑑記
配屬將校	遠藤 舒
教練	
助教授	武田 武雄
支那語	岡田 峻
西班牙語	田尻 摩幸
理化學	
講師	小白 寛
体操、教練	山崎与右衛門
珠算	福田 要
農業大意	永積 安明
修身、國語	

